この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

2025-7-28　若い世代視点からのライフデザインに関する検討会（第１回）

13 時 00 分～15 時 00 分

○柴田座長　時間になりましたので、始めたいと思います。これから、若い世代視点からのライフデザインに関する検討会の第１回ということで、よろしくお願いいたします。

私は、この検討会の座長を務めることになりました、京都大学大学院人間・環境学研究科の柴田と申します。よろしくお願いします。

この会では、若い世代のライフデザイン支援をさらに進めていくための必要な方策について、若い世代の視点から議論を深め、検討するものです。

若者構成員の方々は、先ほど懇談をされて打ち解けることができたということで、とても良い取組だなと思っております。そういった形で、ざっくばらんに御意見をお聴きできればと思っております。

第１回となる本日は、ライフデザインの取組の背景や意義、支援の現状等について、認識や課題について幅広に御意見を頂戴し、議論ができればと考えております。

本検討会は、有識者構成員のほかに、多くの若い世代の方々に構成員として参加いただいています。若い世代の構成員の皆さんから、多くの多様な発言をいただくことで、充実したディスカッションにできればと考えております。

また、できるだけリラックスした雰囲気の中で進めたいと思いますので、構成員の皆さんは全員、「さん」付けという形で、皆さんお互いを「さん」で呼ぶようにいたしましょう。よろしくお願いします。

本日は、小室さんと島津さんがオンラインでの御参加となっております。また、齋藤さんは御欠席となっております。あと、小室さんが１時半頃にオンラインに入室される予定で、14 時半頃に退出される予定と伺っております。なので、小室さんが入室されましたら、適宜私の方から御挨拶をお願いしようと思います。

議論に入る前に、初回ですので皆さんの自己紹介をお願いしたいと思います。１人当たり１分程度という形でお願いできますでしょうか。

まずは、私の後に、参加者プロフィールの順番、五十音順に並んでいるので、その順番に自己紹介を簡単にお願いできればと思います。有識者構成員の次に若者構成員という順番になります。

まず私から、プロフィールにも書いていますけれども、柴田でございます。ここに、いろいろ書かせていただきました。私の専門は社会学です。

ちなみに、事前に室長の橋爪さんのプロフィールを見本としていただきましたが、残念ながらこの参加者プロフィールには入っていないですね。橋爪さんのプロフィールもすごく大事な情報だなと思いました。やはりこうやって官僚の方が、どういった

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

背景があってこういったお仕事をされていて、今もどういった状況かというのはすごく大事な情報で、1つのロールモデルになるのではないのかなと思います。また良ければ皆さん、多分見本としてはいただいていると思うので、また見ていただければと思います。

私自身は、東京の郊外の核家族、祖父母が遠方の核家族で育ちました。両親は、当時は珍しいフルタイム共働きだったのですが、父がやはり長時間労働で、育児は母とちゃんと半々で分担していたのですが、家事は父がほとんどしなかった状況で、私は子どもながら「おかしいなあ」と疑問に思っていたので、そういった問題意識もあって、今も「働き方」や「子育て」、それらの環境を改善するいろいろな政策の効果など、そういったところに関心を持って研究をしております。よろしくお願いいたします。

ではこの順番で、天野さん、次に自己紹介の方お願いします。

○天野構成員　はい。ニッセイ基礎研究所の天野と申します。

私自身は、生まれも育ちも東京都ですが、祖父母は奈良県と愛媛県の出身という地方三世です。両親が大学進学で東京に出てきました。

父は典型的な昭和男子で、「育児家事一切やりません」という人です。父方のおばあちゃんが近居をしてくれていたので、私はそこで育ち、ベビーシッターさんとお手伝いさんとおばあちゃんで、娘3人が育ちました。私が結婚した後に、両親は離婚しています。

自分の家族歴からも、いろいろなライフデザインをこどもの目で、若者目線で見ることは大事だなと思っている次第です。どうぞよろしくお願いいたします。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。次、オンラインで御参加の島津さん、お願いいたします。

○島津構成員　はい、こんにちは。はじめまして、島津と申します。今音声は大丈夫でしょうか。

○柴田座長　はい、とてもクリアに聞こえております。

○島津構成員　ありがとうございます。今日は次の会議がございまして、2時45分くらいに退出しますが、それまでよろしくお願いします。

自己紹介ということですけれども、パワポのスライドの方を作らせていただきました。生まれも育ちも、福井です。ソウルフードと書いていますが、本当に大好きなのがソースかつ丼とおろしそばです。

今回いろんな生き方ということが少しディスカッションのポイントになると思っていて、今は大学の研究者をやっていますが、大学の研究者になろうと最初は思っていませんでした。こどもの頃から「ピアニストになりたいな」と思って、ずっとピアノをやっていて、芸術大学を受験したけれども上手くいかず、「どうしようかな」と思っ

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

て、本当に右往左往していました。そういった時に、ある映画を観て、その映画の主人公がいた大学に行きたいなという、ふとしたことからその大学に入って、ひょんなことから心理学を学びました。その後、すぐ大学院に行ったのではなく、あるテレビ局で営業を担当していました。そこで、本当にクタクタになるまで働いて、そこで働くということの意味や、健康が本当に大事だなということを実感し、大学院に再受験して戻りました。そこから、働く人のメンタルヘルスやストレスを勉強しているということで、臨床心理士と公認心理師の資格を持っています。

妻も働いておりまして、長女が大学2年生、長男が高校2年生の4人暮らしです。

このようなこともありまして、決してストレートじゃない、このような生き方もあるのかもしれないな、ということで、今日はいろいろ皆さんのお話を聞けるのも楽しみにしています。どうぞよろしくお願いします。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。それでは、宮木さん、お願いいたします。

○宮木構成員　はい、皆さんこんにちは。第一生命経済研究所の宮木と申します。

私は32年目の職業生活を送っておりますが、入社当初は、ライフデザイン研究所という第一生命のシンクタンクで、それが2000年代に合併して、第一生命経済研究所になり、そのままライフデザイン研究部というところに所属しましたので、30年以上ライフデザインの研究をしているという、稀有な職業人生です。

私の場合は夫がアフリカに転勤していたことがあって、その間ワンオペで小さい娘たちを育てたという経験から、家庭のマネジメントみたいなところに非常に関心があり、「移動時間をとにかく削減して職住近接する」、「探し物の時間をゼロにする」、さらに興味があれば後で見ていただきたいのですが、「コーポラティブハウス」というみんなでマンションを建てるという形で、コミュニティを作って暮らすということをやりました。非常に地域に密着しておりまして、「お祭りやっています」っていうのも（自己紹介に）書いてありますけれども、とにかくその地域の人たちの力を借りて子育てをしたという経験が、私の中では自分で良かったなと思っているところなので、地域のつながりと子育てみたいなところでも、お話ができたらなと思っております。どうぞ、これからよろしくお願いいたします。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。それでは今度は、若者構成員で五十音順ということで、岩本さんお願いいたします。

○岩本構成員　はい、よろしくお願いいたします。

大学2年の岩本和樹と申します。プロフィールはこんな感じですけれども、教育学コースというところに今いて、そこで教育学であったり、教育行政であったりを学んでいる最中です。あと、教育課程を履修しているので、教育について考えることが多いです。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

大学生として、ライフデザインや周りの生活などを中心に意見が言えたら良いかな、と考えております。よろしくお願いいたします。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。では、次、郡司さん、お願いいたします。

○郡司構成員　はい。皆さんはじめまして、よろしくお願いします。

郡司日奈乃と申します。所属は2つありまして、千葉大の大学院生、博士後期課程の現在2年生です。専攻は、教育学になります。

もう1つは、一般社団法人Spiceという非営利型の一般社団法人をやっています。千葉を中心に活動していて、教育事業であったり、こども家庭庁さんとのつながりでいいますと、こどもの居場所づくりとして、10代・20代を対象にしたユースセンターを民設民営でやっていたり、そういった団体の代表理事をやっております。

99年1月生まれの26歳で、生まれてからずっと千葉県で過ごしています。長く住んでいたのは船橋市ですが、今は千葉大の近くで、千葉市で住んでいます。

子ども会活動をずっとやっていて、いわゆるその地域で育つということを幼少期からずっと経験させてもらっていたことから小学校教員になろうと思いましたが、やはりどんどん教員になって疲れていく、辞めていく友達を見れば見るほどに自分自身がそちらに行くのではなくて、「外側から変えていきたいな」と思いました。民間コンサルを1回経由し、再びアカデミアの世界に戻ってきたというところでございます。

触れずにはいられないので、触れるのですが、今週末、結婚式を控えておりまして、8月2日に挙式をします。学生団体、コロナ禍の学生団体の活動の中で出会って4年半くらいお付き合いした方と同い年のパートナーと、結婚を控えているのですが、夫婦別姓を待っています。私は自分の名字がすごく好きで、名字の印象が、やはり強いですよね。濁音2つ付くものはなかなか無くて、皆さん「郡司」と良く覚えていただいているので、「夫婦別姓が良いな」と思って、今事実婚の予定でございます。でも、30歳になるまでには1人こどもをと、思いますが、自分自身博士号取得のタイミングと重なりそうで、どうなることやら、というところで、まさしくライフデザインを迷っているようなところでもあります。ぜひ当事者の等身大の声をお届けできればと思います。よろしくお願いいたします。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。では次は小林さん、お願いいたします。

○小林構成員　はじめまして、小林真緒子と申します。

興味分野としては、若い人、私ぐらいの方も含めて、どのように意欲を持って、学びに前向きに向き合えるのかというところにすごく関心があります。大学院では教育工学を学んでおり、一般社団法人アンカーでは、探究学習やキャリア教育の授業内容を学校の先生と一緒に考えたり、大学生・大学院生として、高校生の探究的な学びっていうのをサポートしたりする活動をずっとしております。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

「次世代ユネスコ国内構成員会」というのは、文科省の管轄下になるのですが、その中でも特に ESD の分野に関心を持って活動しています。

このような活動をしている動機としては、中学生の時に、結構偏差値や点数にすごく囚われてしまって、プレッシャーを感じ、学びの目的みたいなことも見失ってしまって、不登校を経験したっていうところがすごく大きいです。学びも含め、人生・ライフというところに、前向きに取り組めるのかというところにすごく関心を持って、今回参加させていただいております。よろしくお願いいたします。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

次の齋藤さんは御欠席ということですので、皆さんこのスライドを見ていただきまして、続けて坂田さん、お願いいたします。

○坂田構成員　はじめまして、よろしくお願いいたします。

西日本旅客鉄道株式会社、JR 西日本から参りました、坂田と申します。よろしくお願いいたします。

私の出身が、奈良県の大和郡山市といいまして、地方出身でございます。その後は、関西を転々といたしまして、大学・大学院は東京に住んでおりました。

その後、関西に戻って就職をいたしまして、今は社会人になって 3 年目でございます。元々大学や大学院の間は、都市計画、まちづくりなどを専門に学んでおりまして、その後、今就職してからは少し毛色が変わり、人事のお仕事をしております。主に会社の中では、仕事と暮らしの両立支援や、勤務制度、ダイバーシティ推進などを専門に担当しています。

これまで教育や、こういった皆さんが専門で述べられているような経験は今まで無いので、逆に自分ならではの新鮮な気持ちで意見などを述べさせていただければと思っております。不束者ですが、よろしくお願いいたします。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。では、中濵さん、よろしくお願いします。

○中濵構成員　ありがとうございます。はじめまして、株式会社フジワラテクノアートという岡山の企業から参りました、中濵庸充と申します。

出身は香川県東かがわ市で、香川県で一番東の市になります。近場で遊びに行く時は父親の車に乗せてもらって徳島のイオンなど、いわゆる商業施設に行くことが多かったなと記憶しています。

大学進学を機に、高校から続けてきた研究活動を経由して岡山に来ました。弊社には、地元が香川なので、すぐに帰れる距離感というところや、キャリアとライフプランと両立できるところに魅力を感じ、今年の 4 月に入社しました。現在研修中の身でございます。

配属先は技術営業部で、主な業務として日本全国でそれぞれエリアを持ち、味噌、醤油、日本酒や焼酎などの、醸造食品の製造に関する機械を販売しております。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

家族構成は、父と母と高校2年生の弟がいて、弟は進路で少し悩んでいるみたいです。しばらく家族には会っていないのでこのお盆で帰省できればと思っています。

私はお酒が趣味で、飲むのも、見るのも、買うのも、楽しむのも、行くのも全て大好きです。なので、休日は基本的に、友人や付き合っている彼女と一緒に、会社で買ったお酒を家で飲んだり、セミナーやフェス、フォーラム等があると足を運んで楽しんでいます。

ライフプランニングやライフデザインについては就職のタイミングも重なり、資産推移や将来像が見えてきて、ちょうど考えをまとめ終えたところです。そういった自分の話を含めて、地域から地域への移住と就職という観点も踏まえて、様々な方向から意見をお伝えできればと思っております。よろしくお願いいたします。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。よろしくお願いします。では、八木橋さん、よろしくお願いいたします。

○八木橋構成員　はい、はじめまして。一般財団法人あしなが育英会から来ました、八木橋美郁と申します。

昨年末に結婚をして、今段々とこどものことだったり、今後の2人の人生設計をちょうど考えているタイミングだなと思いつつ、私自身、20代の時はアフリカのウガンダに出向で赴任をしていたり、あと、今日は関西の方が多くいらっしゃいますが、神戸の事務所でも働いていたり、自由にしていた部分もありました。今は在宅ワークや、土日含めて勤務もありますが、落ち着いた生活をしてきたなとは思っています。

この貴重な機会に皆さんのお考えを踏まえつつ、私もしっかりライフデザインしていけたらなというふうに思っていますので、よろしくお願いいたします。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。では、皆さんありがとうございました。

本日は、三原大臣に14時頃から御参加いただける予定になっております。あと、先ほども申し上げましたけれども、室長の橋爪さんも参加していただいております。よろしくお願いいたします。

あとあわせて、今回、陪席あるいはオンラインでオブザーバー的にこども家庭庁の他に、金融庁、文科省、厚労省、国交省、経産省、全国知事会、全国市長会、全国町村会の方にも御参加いただいております。よろしくお願いいたします。

それでは、ここから早速議論を始めたいと思います。本日は2つの議題について議論いただきますが、まず事務局より議題①と議題②の両方について御説明いただいた後に、意見交換の時間といたします。では、橋爪さんよろしくお願いします。

○橋爪室長　それでは、お手元の資料をお願いします。皆さんには、基本的には事前に御説明をしているものからの修正はありませんので、少し手早くいくと思いますけれども、もしこの資料について質問があれば、途中の意見交換の中でも頂ければと思っております。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ （https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

この検討会の開催趣旨でございますけれども、冒頭柴田先生から御紹介いただいたとおり、前回のワーキンググループの議論を踏まえまして、ライフデザイン支援をさらに進めていくために、若い世代の視点から検討していく、とさせていただいております。

前回のワーキングのおさらいですけれども、ライフデザインに関する議論を少しここで取り出しております。まず、若い構成員中心に出た意見として、ライフデザインに関する意識、生き方に関する意識ということを取り出しておりますけれども、社会的に正解とされる生き方が消失した中で、若い世代は自分自身が納得できているか、「納得解」を大切にする傾向があるということ。親の世代が若い頃を過ごした時代と、社会の価値観や選択肢の幅が全く異なっていると、こうした中で自分の親とは異なるバックグラウンドを持つ近い世代の様々なロールモデルを知ることによって、自分の将来の「解像度」を高めたいということ。それから、結婚やこどもを持つことに関して、当たり前のことではなくて、自分にとっての幸せを実現する手段の１つにすぎないということ。子育て期も夫婦ともに働き続けることを理想の夫婦像とする。こういった意識面での若い世代の意見がございまして、要はその若い世代は生き方を自分らしく考え、選択していく必要がある一方、難しさを感じている、という現状ではないかということです。

それで、ライフデザインというものの取組を進めていく必要があるだろうということでございまして、ライフデザイン支援というものは、特定の選択を前提とするのではなくて、選択肢として前向きに捉えたり、希望を叶えたりするための取組であるべきということ、「知っていて選ばない」ということと「知らずに選べない」ということとは異なるということ。学校、自治体、企業での取組を促して、支援の裾野を広げていくことが重要であり、その際、若い世代のライフデザインを応援しようという機運醸成も必要であるということ。支援の中身に関して申しますと、将来の選択に係る事実の情報というところと、実際に体験して得られる実感の両方が必要だろうということ。まさに、地域性も考慮して、年代に応じてやはり価値観、必要な情報等も変わってきますので、必要な内容を適切な方法で提供していくことが重要だということ。そういった取組についての示唆が前回のワーキンググループの内容でございます。

ではまず、議題①の方、ライフデザインそのものの取組の背景と意義ということで、いくつかデータを紹介してまいりたいと思います。今、ライフデザインが求められる社会背景ということで、例えばの模式図でございますけれども、働き方、学び方、ライフコース、それぞれ多様性・変化が生じてきている。こうした中で、若い世代が希望する人生を選択していくことが求められるということ。いくつか、駆け足で参りますけれども、データをお示ししますと、共働き世帯が増加し、出産後の継続就業率も高まっているという現状があります。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ （https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

希望する仕事と育児の両立の在り方ということで、女性の方はこどもの成長に合わせて働き方の変化、いろいろ希望が変わってくる。男性は柔軟な働き方を、年齢に関わらず柔軟な働き方ができるように、というデータということです。

それから、介護との両立ということもよく挙げられているという現状だと思います。

働き方の多様性という意味で、テレワークの普及、それからフリーランスという働き方、自分の仕事スタイルで働きたいというところから、フリーランスという選択がされている。

それから学びという面につきましても、特定分野に特異な才能のあるこどもや不登校傾向のこどもなど、多様化する中でこうした学びの機会の必要が生じているということがあります。

それからリスキリング、あるいはリカレント教育というものも現状諸外国に比べると低い状況にあるけれども、こういった学びの必要性も出てきていると思います。

それからライフコースにつきましては、女性のライフコースとして「両立コース」が理想ということですけれども、予想となると「非婚就業コース」が上回り、そこにギャップがあります。

これは内閣府の試算でございますけれども、出産後の女性の働き方によって生涯可処分所得が変わってくるという試算結果もあるところでございます。

結婚やこどもをもつことへの意識では、先ほども御紹介しましたけれども、結婚、こどもをもつことは自然なことであるという既婚者は約 5 割程度という状況。

それから、未婚者の 6 割に結婚意向があって、結婚意向のある未婚者は 9 割がこどもを希望している。他方、結婚意向の無い未婚者の約 3 割がこどもを希望しているという調査もございます。

それから、結婚の在り方、見合い・恋愛、それからインターネットを活用している、この辺もかなり変わってきている、ということでございます。

さらに離婚件数、直近で見ますと約 18 万件ということで、内訳で見ますと、同居期間が長い夫婦の割合が上昇傾向にあるとのことです。

それからちょっと先ほどと重複する部分がありますけど、ライフコースという面で見てみましても、男性の育休取得率は、最近増加しているところにあります。

家事関連時間というのは、依然として女性の方が多くございます。

それから暮らし方という意味で二地域居住、こういったものに関心が高まっているということです。

こうしたデータをお示ししたうえで、ライフデザインを考えることってどういうことだろうということでありますけれども、若い世代がライフデザインに取り組むことによって、多様化する世の中において人生を選択するために必要な情報を取得し、自

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ （https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

分らしく希望する人生を選択し、それによって、ウェルビーイングを実現していくと、こういった意義が見出せるのではないか、ということでございます。

それからライフデザインの効果ですが、民間の研究成果において、ライフデザインを行うことが幸福度にプラスの影響を与える、という研究もあります。

こうした個人がライフデザイン、ウェルビーイングを追求していくことは、やがて社会課題の解決にも寄与していくのではないかということを、お示ししています。

議題①に関しましては、これらも踏まえまして、ライフデザインを考える機会の必要性をどう考えるか。あるいは、ライフデザインが必要な社会的な状況・背景について、抜けている点はないかということを若い方から意見をいただき、また有識者の方から補足いただいて、様々、「あ、こういう点があったよね」といったことを意見交換できればというのが議題①でございます。

続いて、議題②についての説明となります。今度はライフデザイン支援の取組という点でございます。ライフデザイン支援とはそもそも何かということ、前回のワーキンググループでは、このように主として進学や就職、結婚、妊娠・出産、子育て、ライフイベントに関して、自分自身の考える見通しを正しく整理して、必要な機会や知識等を提供する、としていました。

こちら割愛しますけれども、ライフデザイン支援に関して言うと、前回ワーキンググループでもいくつか視点と、こういった取組の方向性、あるいはどんな地域、大学、それから企業等に取組を広げていくべき、各年代に応じた支援が必要だといったことでございます。

それから、ライフデザイン支援といったときに、若い人たちに「これまでどんなことを学んできましたか」ということを尋ねると、やはりキャリアやマネーが相対的に多く出てきます。他方、その他ライフイベントに関して考える機会というのは相対的に少ないというところです。

現状、ライフデザイン支援というものはどういうものがあるかというのを簡単に図で示しますと、真ん中あたりの学校におけるライフデザイン、それからキャリア教育ということ、それから企業等における金融経済を始めまして様々な働き方に関する学びを提供しているところもありますし、社会人向けについては、同じく自治体の取組や、企業内で自社社員向けに様々な取組もある、ということです。

こども家庭庁の現状の取組でございますけれども、様々な御意見を踏まえながら、左側、必要な情報知識を届けていこう、という情報発信の取組は今着手しているところでございます。若い世代に実際入ってもらって、若い世代に響くような情報発信、情報提供ということ。それから、まさにライフデザインをしっかりと考える機会を増やしていくということで、自治体の取組支援、それから民間企業でそういう取組をし

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

ているところと連携していこうということ、そういった取組に今着手しているところです。

今後、議論を進めていくにあたりまして、どういったニーズ、それから支援があるだろうということを、一旦、社会に出る前後で考えてみたらどうかということでございます。

その際、ライフデザイン支援に携わり得る主体として、こういった様々関係者があります。

社会に出る前後で少し必要な情報等を整理してみたものでございます。社会に出る前は、そもそもライフデザインの必要性から始まりまして、健康面への意識、プレコンセプションケア等もこども家庭庁でも注力していますけれども、そういったこと等々を、右左に入れております。

ということで、議題②につきましては、支援という切り口において、どういったものがあると良いのかといったこと、あるいはそういった支援を受けてどういったライフデザインの状態にありたいか等について、また若い方から御意見をいただきながら有識者から補足をいただき、議論をできればと思います。以上でございます。

○柴田座長　はい。橋爪さん、ありがとうございます。ここから議論に入りますが、先ほど申し上げましたとおり、小室さんが先ほどオンラインで入室されたということですので、一言御紹介いただければと思います。

小室さん聞こえますでしょうか。

○小室構成員　はい、聞こえます。こちらの声は聞こえていますでしょうか。

○柴田座長　良く聞こえています。じゃあ、簡単に自己紹介いただければと思います。

○小室構成員　はい、ありがとうございます。

働き方の支援をしているワークライフ・バランスの代表をしております、小室と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私自身が長男を出産した3週間後に起業をしました。そこから不妊治療が3年半あったり、介護が2年半あったり、夫の転勤で2年以上海外に住まざるを得なかったり、仕事だけをできるという時間は一度も無かったという形で今日まで来ました。

これからは、日本の人口のほとんどが仕事だけに専念できる時間が、人生の中で何%あるのか、というような生活になっていきますが、やはりロールモデルにそういった方がいらっしゃらない中で、自分がそういう生活をするので、非常にライフデザインが困難ではないかなと感じています。私の体験ももとに、それから専門分野である働き方というところのいろんな企業ですごく良い事例、経営者も働く本人たちもどちらも win-win な例がびっくりするくらい沢山出てきているので、「あ、こんなやり方がある」ということがもっと日本国中に広がっていくお手伝いができればなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

それでは、議論に入っていただきたいと思います。まず、若者構成員お一人お一人から議題①について、つまりライフデザインの取組の背景と意義について、御質問も含めて大丈夫ですので、御意見いただきたいと思います。

具体的には、若い世代から見て、現在及び将来を考えた時、ライフデザインを考える機会の必要性をどう考えるか、ライフデザインの意義についてどう考えるか、ライフデザインを考えるにあたっての社会的な状況、背景について抜け漏れている視点はないか。先ほど橋爪さんからいろいろ御説明いただきましたけれども、そこでもし漏れている視点があればということです。

初回でもありますので、まずは御自身が将来の自分について考えていることや、これまでの経験、御自身が日頃取り組まれていることから思うことなど、御自身に照らし合わせて語っていただいても大丈夫です。

では、どなたからでも大丈夫ですので、御自分の経験に照らし合わせながら、背景と意義について御意見いただければと思います。挙手をいただければと思いますが、若者構成員の方々いかがでしょうか。では、中濵さん、ありがとうございます。

○中濵構成員　ありがとうございます。中濵です。一発目の方が気が楽かなと思って、発言させていただきました。

自分の経験を踏まえてということで、まず１点目のライフデザインを考える必要性についてですが、自分自身がライフデザインを考えたタイミングとしては、就職活動を行っていた時期と、就職した後の４月・５月の２か月間です。

就職のタイミングで考えたこととして、おそらく働き盛りになるであろう 30 歳から 40 歳になる頃が、最も自分自身にかかってくるイベントが多くなってくる時期かなと、思うようになりました。

１つずつ考えていく中で、福利厚生や、給料のような、自分が直接得られるものを提供してくれる会社は、都会や、大企業に集中していることは分かっていました。もちろん介護のことも考えていたので、そういったところで地元に帰れることや自分自身がキャリアを会社に邪魔されない、選択肢を与えてくれる会社プラスその取組が社員に広まっている会社というところは重視して探しました。

結果、良い会社に入社できました。弊社は女性社長・副社長の体制であり結婚・出産に関して、パートナーになるべく迷惑をかけないような働き方を推奨する環境があります。最近の世の中で言うような男性の育児参加という言い方も違和感を感じておりますが、家庭という１つのプラットフォームをパートナー同士で築く体制を支えていただけるような会社であるかどうかも重要な観点として考えていました。

ここ２カ月ですごく考えていたのは、資産推移に伴う人生についてです。弊社は入社してから、「あなたは何歳でこの役職に就けば、このくらいの年収でこういうような

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

手当を受けられます」というのはある程度公開しているので、どこまで自分のライフイベントやパートナーに割くことができるのかといった明確なビジョンが見えてきます。実は僕の彼女も同級生で教員をしておりまして、教員はイメージですが、育児もすごく難しく、学生・児童もいるので時間を取りにくい仕事という印象がありました。

以上のことを考えると、ライフデザインを考える機会は将来を明確にするためにも必要ですし、早ければ早いほど良いなと思います。逆に早すぎれば自分は考えることが無かったので、就活や受験のようなフィールドが変わるタイミングで的確に必要過多な情報ではなく、最小限に絞った情報をいただけると嬉しかったなと思いました。

2点目のライフデザインの意義についてですが、当初自分の将来がすごく曇っている状態だったので、自分はこれから何をして、どういうライフイベントがあるのかを一個一個整理していくような時間を自分で設けました。それが多分ライフデザインなのかなというふうに自分の中で思っています。

最後に、言えるような立場ではないかもしれませんが、今の世の中情報が溢れていて、将来についてすごく不安を煽られました。インターネットで調べるので様々な視点が飛び込んできて、それが自分に対して当てはまっているのかも分からないし、本当に正しいのかどうかまず精査しないといけないので、正しい情報を最小限に且つ効率的に得られるようなところが社会的な状況としてほしいと思っています。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。中濵さんありがとうございました。

後で事務局から、御回答いただきたいと思いますが、続けていかがでしょうか。では坂田さん、よろしくお願いします。

○坂田構成員　若者構成員で参加させていただいている坂田でございます。よろしくお願いいたします。

私は、先ほど自己紹介の際にも少し述べさせていただいたとおり、今企業で人事担当として働くにあたって、私自身もそうですし、社員の方々の働き方、人生といったところにも関わることが多い立場なのかなと考えております。

そのような中で、自分の視点と周りの方の考えているところを少しずつ考えながら、先ほど様々な定量的なデータをもって示していただいたところが、まずはすごく興味深いなと思っておりました。

というのも、なかなか企業側の一担当者としては、これまで存在していた会社内の制度や、行政が提供している制度・サービスといったものが、かなり画一的な人生プランに則って提供されていることが多いように感じておりまして、そのような中で、一方で一働いている若者の立場から見ると、人生の選び方や、どうやって生きていくかというところは、かなり人それぞれというところがあるのではないかなと感じていたところです。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

そのような、人それぞれというところ、多様な人生を選べるというところが、まさに先ほど御提示いただいた定量的なデータの中に、いろいろと表れているポイントがあったように感じ、一若者としてすごく興味深く聞かせていただきました。

この先のライフデザインということについては、こちらも少し会社の立場も少し影響を受けつつの意見になってしまいますが、会社側で提供して、社員の人生設計や、そういったところを考えていくには、どうしてもキャリア開発など、キャリアに重点が置かれてしまうというのは、先ほども御説明があったかもしれないですが、一社員としてもそれを感じているところでございまして、キャリア以外の本当のライフの人生の部分をどうやって学んでいけばいいのか、どうやって周りから情報を得て決めていけばいいのか、というところがすごく不安定な状況になっているのかなと考えております。

先ほど申し上げましたとおり、一人ひとりの人生の選び方が多様になる中で、受動的に構えていてもなかなか周りを見渡しても、自分で得たい情報や、得たいロールモデルを見つけられないということが、今の時代変わってきているところなのかなと思っているところです。私自身としても、今までライフデザインのことを正直なところあまり深く考えたことは無かったですし、こういったことを考えたことがライフデザインだなと思った経験も正直無いというところではありますが、一方で先ほど中濵さんもおっしゃっていましたけれども、何が正しい情報なのかを見極めながらライフデザインをしたいなという気持ちはある一方で、どういった箇所で誰と一緒にライフデザインをしたらいいのか、誰と一緒にというのは、誰に相談したら良いのか分からない、ところが正直なところでございます。先ほど企業側の立場としてと、申し上げたところですが、会社が提供してくれる場では、正直物足りないのではないのかなと思っております。

会社側としては、正直若者の立場というより、どうしても会社目線でのキャリアの開発になってしまうので、そういった中で、自分のためのライフデザインというものをどういった場でできるのかな、ということは考えるべきだなと個人的に思っているところです。具体的に、ではどういった場が、という具体的な良い案が思いついているわけでないのですが、ライフデザインを考える意義としては、やはりどういった場で提供するのか、というところも含めて、一若者として考えていきたいところでございます。少し雑駁な意見になってしまいましたが、以上でございます。

○柴田座長　はい、坂田さんありがとうございます。では、挙手お願いいたします。

はい、では岩本さんお願いします。

○岩本構成員　ありがとうございます。はい、岩本です。

僕の考えとしては、まずライフデザインをする、考えることの意義というのはすごくあると思います。それはなぜかというと、身の回りの話が中心になってしまいます

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

が、僕個人が今まで高校や中学で、ライフデザインというのを考える機会があったかというと、それは無かったです。それがなぜかというと、おそらくライフデザインを考えるための、知識も無かったですし、考えなきゃいけないということも分かってなかったですし、その当時やることに、目の前ですごく手一杯になってしまうというのが、あると思っています。今大学生になってもそれは変わっていなくて、ライフデザインを考える必要性ということを持っていても、どう考えたら良いか、何を決めたら良いか、そういうことは今いる場所の知識ではやはり分からなくて、大学生の周りのみんなと話していても、それを考えている人もいれば、全く考えていない人もいます。それはどの年代でも２分化しているような気がしていて、よく将来について考えている人と全然考えていない人の半分半分なのかな、と個人的な感触としてはあります。

ライフデザインを考えてこなかったので、そのための知識が無かったことや、あとは考え方、例えば今自分が就活をするとなった時、まだ２年生なので就活は少し気にし始めるぐらいの年代ですけれども、就活をどうするか、どういう業種があってという情報はすごく与えられているように感じますが、「なんで就活をするのか」、「どういう生活の中でどういう方向性で就活をしていくのが良いのか」というような、そういう根源的な疑いみたいなことについては、情報が与えられていなくて、するかしないかという判断は、完全に個人で調べて考えてするようになっていて、そこに対する支援は、不足しているかなと感じています。

半分くらいは、個人個人で調べられる情報が不足しているのは、「あなたが調べていないだけじゃないの」と言ってしまえることでもあると思うのですが、でもその知らないことを調べるのはやはりすごく難しいですし、そもそも最初に第一歩として何をしたら良いのかというスタートラインに立つ原因が必要なのかなと考えています。

以上です、ありがとうございました。

○柴田座長　はい、岩本さんありがとうございます。では、続々お願いいたします。

はい、では八木橋さんお願いします。

○八木橋構成員　はい、八木橋です。

私自身、ライフデザインはことあるごとに、「いくつぐらいで結婚したいな」や、「いくつくらいでこどもが欲しいな」というのは考えていましたが、何ひとつ上手くいっていない、いっていないというより計画通りには進んでいない。ですが、別にそれをネガティブにも捉えていないですし、「海外赴任行ってみない？」だったり、国内の赴任だったり、自分の成長につながるタイミングがあったから、そのライフデザインを書き換えて生きてきたなと、振り返ってみると、やはり計画通りいくものばかりではないし、それがいっていないからイコールダメだ、あなたのデザインは上手くいっていないよ、というのも少し違うなというのは、率直に感じた意見です。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

その上で、意義に関しては何のプランも無いよりかは、大体の目安であったり、こういう風に働きたいであったり、先ほどの就活のこともそうですが、就活しないといけないというのは分かると思いますが、就活のタイミングでこういう生き方をしたいや、こういう家庭を築いていきたいということに基づいて、それを大事にするのであれば、「就活する時にこういうところに気を付けた方が良いよ」や「こういう福利厚生気にしてみた方が良いよ」などの、アドバイスしてくれるような存在というのは大事なのではないかなと思いました。

あと同時に私も今、こどものことなどを考えていった時に、やはり自分の知識に基づいてこどもを生む前に育休のことは「こういうことを調べておこう」や、「一緒に共働きだけど、一緒に育休を取れた時の手当ってどうなるのだろう」など、自分の知識に基づいた検索はできますが、それ以外の抜け漏れていることを気づくことができないというのをすごく感じています。ネットで検索してもどうしても上手くいっている人の例しか出てこない。失敗した人が「あ、これ考えておけば良かったな」みたいなものも見える化がされていると、自分のいろいろな固定の視点ではない、視野の広がった形の情報も得つつ、自分のライフデザインというものを築いていけるのではないかなと考えています。

○柴田座長　はい、八木橋さんありがとうございます。では、郡司さんお願いします。

○郡司構成員　はい、ありがとうございます。

資料の 3 ページ目に「社会的に正解とされる生き方が消失した」ということがハイライトされていますが、そういうわけでもないのかなと、改めて自分自身このワーキンググループに参加させていただく中で感じました。

というのも、やはり良い大学に行って良い企業に就職するというルートは未だに王道ですし、転職というものこそ当たり前になってきましたけれども、新卒のカードを使って大企業に就職するというのが、私もそれが良いというのを潜在的に思っているというか。いろんな人と会話する中でやはりそれが王道であり、それが正解なのだというのは植え付けられているなという感覚があります。

大手であればあるほど、すごく偉いみたいな感じです。それは、久しぶりに昔の友達に会ったり、同窓会的なところに参加したりした時に「すごいじゃん」というような。企業名を聞いて、パって分かるところに行く人ほど、もてはやされるというのはあるので、それがきっと社会的に正解なのではないかなというのを、植え付けられ続けてきた 26 年だったなと思います。

私は 1 回民間コンサルにいきましたが、それを辞めるという決断をしました。つまりその王道ルートをなぎ倒すくらいに、自分が使命感を持ってやりたい、自分が最前線に立ってどんどん道を切り拓いていきたいと思えるような分野を見つけられました。ものすごく不安でしたが、ある種ライフデザインをなぎ倒してでもそちらの世界

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

に、アカデミアの世界に戻ってきて、そして一般社団法人を起業したという経緯もあります。

私自身の決断ができたのは、私が強かったというよりかは、周りにすごく環境を作ってもらったというのが大きくて、まずパートナーに理解があって、パートナーはいわゆる王道の社会人をやっていて、食いっぱぐれないというところをやってくれている。

あとは両親にも理解があって、私は今千葉市に住んでいますが、両親は今千葉県船橋市ですので、電車で30分くらいで行けるような距離に住んでいて、何かがあった時に親が助けてくれるという保証を親が示してくれたというのは、ものすごく大きいなと思っています。いわゆる実家が太いというわけでは全くありませんが、実家に理解があって、パートナーに理解があるからこそ、私自身はチャレンジングなライフデザインを組めているなというのは、すごく当事者としても思っているところです。

ライフデザインというものを自分自身が考える機会はもちろんありましたし、就職だったり、「大学院進学、本当にするの？、しないの？」というようなタイミングで何度も何度もありました。高校受験も大学受験もこういうきっかけだと思っています。現時点の私としては、もう自分で切り拓いていくしかないというか、踏ん張るしかないなと思いながら、ある程度漠然としたライフデザインはありつつも、それを切り拓けるかどうかは自分にかかっているなという、ある種のプレッシャー、ひやひや感の中で戦っているという状況です。

また当事者として、今回のデータの中には無かった視点かなと思いますが、親の介護について学ぶような、話すような場面があると、私自身良いのかなと思っているところです。

というのも、父方の祖父母が90を超えて施設に入って、父が毎週末会いに行っていて、自分の名前を忘れられてしまうけれども会いに行くという父の姿を毎週聞いています。そういった状況を私が今この段階から知って聞いて、それを踏まえて父が今後どう老後を過ごしていきたいのかということを話せるようになってきたので、親の介護についても「学ぶ」だったり、「気にかけられる」というようなきっかけがあるといいのではないかなと私自身感じているところです。以上になります。

○柴田座長　はい、郡司さんありがとうございます。では小林さん、お願いいます。

○小林構成員　はい、ありがとうございます。

そうですね、皆さんの意見を聞きながら考えていたらどんどん意見が膨らんできて、なかなか発言に踏み出せていなかったのですけれども。

私は、このライフデザインの意義というのは結構自分でキャリアを選択するための自分の価値観や譲れないものなどを探す1つの方法としてすごく重要なのではないかなと思っています。先ほど郡司さんもおっしゃっていましたけれども、社会にとっての

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

正解に揺さぶられる瞬間は誰にでもあって、そこに関して疑問や違和感を持ち、何かしていこうというところにこれれば、自分で情報を探しに行き、どんどん進んでいけるというのがあるとは思います。ですが、自分の違和感をもとに行動に移すのは簡単ではないと思います。私も中学時代に学校に行けなくなったのは、良い大学に行く、そのために偏差値をとにかく上げるみたいな、社会的な正解みたいなところと自分の間におそらくギャップがあって、そのギャップに違和感やプレッシャーを感じていたらからでした。それがわかったからこそ、その後の行動につながった気がします。まずは自己決定するための材料を引き出して、整理するのが重要だと思います。その上で、それを自分の中だけでなく、他者と一緒に深めていくような作業がライフデザインであり、意義があるのではないかなと思っています。

あともう１つは、女性活躍や男女に関する様々な政策など、いろんな企業さんでも取組をされている中で、なかなか進まない原因は世代間の価値観のギャップがありますし、同世代であっても地域によるギャップがあるのではないかなと思います。それが生まれている原因は、今までライフについて、気軽に対話したりする機会があまり無かったからではないかなと思っています。

価値観が違うのは当たり前ですが、そこまで深く話し合うという機会が無いからこそ、みんなが自分と違う人生を歩んでいて、その人たちの人生に関する価値観は経験に基づいてできているというところが、ブラックボックスのようになってしまい、変に偏見を持ってしまいます。ライフデザインを、特に学校教育の分野に取り組むという意味では、他者の人生に寄り添うことや理解し合うこと、自分が良いと思っている自分の経験に基づいた生き方は、必ずしも他者に必ず当てはまるものではない、ということを学ぶ機会にもなるのではないかな、と思いました。以上です。

〇柴田座長　はい、小林さんありがとうございます。

それではこれで一通り、若者構成員からの御意見いただけましたので、まずは事務局からぜひ回答をお願いしたいと思います。時間が押していますが、お願いします。

〇橋爪室長　はい、ありがとうございます。

手短に、「情報過多である」という議論がありました。正しい情報を最小限に効率良く、まさに前回のワーキンググループでも、いろいろな情報が溢れる中で、一方でフィルターバブルという中で、自分が接している情報が偏っているのではないか、という疑問を感じつつも正しい情報を得るためにはどうしたら良いかという悩みが出されたところでありまして、我々もそのライフデザインを考える際に必要な情報提供をどうしていこうかという取組は別途御紹介したいと思いますが、取り組んでいるところであります。

〇柴田座長　はい、橋爪さんありがとうございます。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

　では、もう少しでおそらく大臣も来られると思いますが、まずは有識者構成員も含めた全体で先ほどのこの3点ですね、ライフデザインの必要性を客観的に示すデータ事項として整理しておくべきものがあるか。ライフデザインの意義について補足・留意すべき点はあるか。ライフデザインに関連する様々な社会課題や背景について抜け漏れている視点・要素はないかということについて、議論していただきたいと思います。

　でも御自由に皆さんから、特に有識者構成員の皆さんはまだ発言いただいていないので、優先的によろしいかと思いますがいかがでしょうか。

　若者構成員からの議論を受けまして、挙手でいただければと思います。オンラインの挙手も事務局で把握いただければと思います。

　では、宮木さんお願いします。

○宮木構成員　若者構成員からの意見、大変興味深く伺いました。

　逆にこちらから御質問してみたいなと思ったのが、若者にとってライフデザインを相談する対象としての「親」というのが、どういう存在なのか。というのも、親って多分年齢的には20、30歳離れていて、今のライフデザインというところでは、正直最新情報を持っているわけではないという中で、でも生き方としては自分を育ててくれたというところで、だいぶ価値観的には影響を受けていると思うのです。そのライフデザインを考えるうえでの親の存在。それと、もう1つ「学校」というのが、ライフデザインとして何を教えてくれているのかということを、伺ってみたいです。お願いします。

○柴田座長　まずはもし今の点に関して、若者構成員からあれば。では小林さん、お願いします。

○小林構成員　そうですね、私の両親はすごく自分には寄り添ってくれていますが、相談相手が親だけだった時は、しんどかったこともあったと思います。ケースバイケースですけど、大学に入ったりして、両親と同じ世代でも、全然価値観が違う方、大学の先生だったりとか、そういう相談相手が、増えていった方が自分的には結構気持ちが楽になった気がします。それは、親が言ってくれていることと自分の思っていることがずれている時に、親は自分のことを思って言ってくれているのにみたいな、変に親子だからこその感情が生まれてしまうっていうのが、難しかったからかもしれません。逆に自分が大変だった時は、すごく親が寄り添ってくれたので、そういう良さもあったのですが、相談が難しかったこともありました。学校に関しては、大学の進路相談であったり、テストというか選択肢みたいなのを選んであなたにはこういう職業が合いそうですねであったり、そういうのを受けた記憶はあるというくらいです。今は、探究学習などでやっている学校あると思いますが、私の時はそうでした。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。他にもし御回答があれば、若者構成員から、では八木橋さん、お願いします。

○八木橋構成員　私は、遺児や親に障がいのあるこどもたちと普段接しているのですが、そうなってくると親御さん自体がやはり生活を支えるので精一杯で、家にそもそもいらっしゃらないし、いたとしてもそうやってゆっくりこどもの人生やライフを話す時間というのが限られてしまっているので、ライフデザインを考える時に、まずは親に相談してみようみたいになってしまうと、そういった環境にいる子たちがどんどん取り残されてしまうのも、違ったりするかなと思います。やはり大学に進学が当たり前になってきた時代で、私自身も大学に進学してから困った時には大学の先生が進路の相談を結構親身になって聞いてくれましたが、高校の段階で、高卒で働くという選択をした子たちにとっても、高校のそういう話を聞いてくれる人の存在というのが、もう少し今より大きくなったらより良いかな、というのは、日々感じています。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。親に頼るような形になると、逆にいろいろ格差が広がると。

　他に若者構成員から御回答あれば。ではお願いします。郡司さん。

○郡司構成員　ありがとうございます。

　私の場合は、親は比較的協力的というか、なるべく親身になってくれる両親だったので、それは良い相談相手でしたが、ある程度自分の中で気持ちが固まってから親に相談する、どちらかというと確認を取るみたいな感じでした。ゼロベースで話すのは、あくまでも友達だったり、先輩だったり、あとは大学の指導教員の先生だったりしています。7割・8割方気持ちが固まった状態で、親に「こうしようと思うけど、どう思う？」と言って、「いいんじゃない」くらいのテンションで親との関わりは持つかなと私自身の経験としてはあります。

　学校の話で言いますと、いわゆる職業体験的なこととして、中学2年生の時に自分自身で希望した先で職場体験をさせてもらいました。あとは、中学3年生・高校3年生の時に進路学習のようなもので、自分自身学んできました。

　あとは、私が高校3年生の時に18歳選挙権が始まり、18歳にフォーカスが当たり始めた時でした。その時に金融教育の一環で、資産形成について銀行の方にお話いたくということが、体育館に学年の生徒が集められてあったのを覚えているかな、くらいです。以上です。

○柴田座長　はい、ありがとうございます。では、小室さんがオンラインで挙手いただいているとのことですので、発言いただければと思います。いかがでしょうか。

○小室構成員　皆さんの意見大変興味深く聞かせていただきました、ありがとうございます。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ （https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

本当はいくつもいくつもいただいたところから伺いたいことがありましたが、時間に限りもあるので、まず中濵さんがおっしゃっていたライフイベントの重要な時期と働き盛りの時期が重なってしまうという不安感というところで、これは自分たちの親世代だとそれは地域社会の助けがあるなど、様々な解決策があってそれが全く今は無いという、すごく大きな違いがあるわけです。この辺りを今回の資料で出していただいた様々なデータに足りていないなと思ったのが、やはり人口構造の違いというところをより若い人に客観的に知っていただくことが重要じゃないかなと思っています。つまり、人口が減り続ける社会と増え続ける社会では、1 人にかかる負担と種類というのが全く違うというところで、それがあたかも自分の人生がすごく選んだ人生がすごく悪いと感じられがちですけれども、「今社会全体がそうなっている」、そしてそれは「結構先に読める」というような、そういったデータがしっかり、いわゆる人口ボーナス期だった 60 年代から 90 年代が、現在はもう人口オーナス期であるというところも、数値としてしっかり見ていって、さらに広めていくと良いのかな、と思いました。

郡司さんがおっしゃっていた「介護の話も知るべき」という観点は、本当にそうでして、独身の叔父・叔母も含めて自分が看るかもしれない人の人数というのが、同時に複数というようなことにもなってきます。

でも社会としては介護に関する様々なサポートがこの 10 年ぐらいでぐんと増えているので、そういうサポートが増えているという点も同時に知るということも重要で、決して若い人にとって介護は遠い社会でもないので、そういったこともライフデザインの一環として、トータルで知っていけるというような、冒頭で御紹介いただいたデータにそういった辺りも加えていただいたら良いのかなと思いました。

そして 2 つ目の論点のところで、補足・留意すべき点というのがあったと思いますが、私が感じましたのは、古いライフデザインの概念を持っている、いわゆる入社した時の先輩層の方に新しいライフデザインの在り方について研修するということが、本当は必要なのではないかなと。

つまり、若い人だけがライフデザインが必要なんじゃなくて、昔の前提でライフデザインをしていてそれが今も自分は正しいと思っていて、入ってきた新入社員や自分のこどもにそれをベースに話をしてしまうという、そちら側も自分のライフデザインをアップデートしないといけないので。

決してそのライフデザインを考えてもらいたいのは若者だけではない、むしろ凝り固まってしまっている人たち。会社の言うことはよく聞きますよね。私も 3000 社コンサルしてきて本当に思いますが、妻から何回早く帰ってきて、と言われても帰らなかった人が、会社から「働き方改革だぞ」と言われたら急に帰るという。帰ってもあまり居場所が無いという人も現在悲しいですがいっぱいいるのですけれども、やはり会

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

社の言うことはしっかり聞くという世代がありますので、会社を通じて新しいライフデザインをアップデートしてもらって、そして若い人に押し付けないようにする。
さらに、定年退職した後の方たちに、自治体を通じて、今の若い人たちの子育てをこういう観点で見なきゃいけないよと。不用意にバスの中などで自分の価値観に基づいて声をかけちゃう高齢者がすごく多いですけれども、そういうものもアップデートしないといけないよ、ここは自治体の力を借りて改めてきちんと広めていかなきゃいけないなということで、そういった観点をぜひこの構成員会の中に入れていただきたいなと思いました。以上です。ありがとうございます。
○柴田座長　はい、小室さん、ありがとうございます。島津さんからも挙手がきていますので、島津さん、お願いいたします。
○島津構成員　はい、よろしくお願いします。
　いろいろ御意見いただきまして、すごく参考になりました。なるほどというのもありまして、まず１点感想ですけれども、やはり社会のスピードがどんどん速くなっていて、「なんでこんなことをやらないといけないかな」と、例えば就活もそうですが、立ち止まって考える時間がますます少なくなっているなという感想です。
　私も普段学生さんと接している中で、大学２年生くらいから就活を始めている学生さんもいますが、「本当になんでこれを今やる必要があるだろうか」ということに疑問に感じながらも周りから取り残されてはいけないというところから、一生懸命もがいている学生さんを見て、もっと立ち止まって「なんで、なんで」と、疑問に思う時間や、もっと考える時間が必要だなと、感想として思っています。
　それから質問したいのですが、例えば、インターネットで沢山の情報が溢れているということも沢山の意見がありました。そういった中で、自分が知らない世界を教えてくれる人がどんなところにいるのか。インターネットじゃなくて実在するものとして、どんな人が自分の知らない世界を教えてくれるのだろうか。例えば、近所の人や親戚の叔父さん、叔母さんなど、実在する人の中で、自分の知らない世界を教えてくれる人としてどんな人がいるのかなということが１点知りたい情報です。
　もう１つは、最近のコミュニケーションですけれども、インターネットによるこういったオンラインの会議が多くなってくると、目的を持ったコミュニケーション、最短の時間で行うことがすごく重視されるようになっています。そうなると雑談のような、ある意味目的の無いコミュニケーションをする機会というのが少なくなってくるのかなと思いました。
　でもそういった中に、生きていくうえでのちょっとしたヒントやスパイスがあるかもしれず、そういった相手がいるのかなと思ったのですが、この辺についてぜひ教えていただきたいと思いました。よろしくお願いします。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

○柴田座長　ありがとうございます。ではまず、島津さんからですね、ライフ等について教えてくれる人はどんな人なのか、といった質問がきましたので、もしよければ若者構成員からお話いただける方、挙手いただければと思います。いかがでしょうか。

はい、ではよろしくお願いします。

○中濵構成員　ありがとうございます。

僕は地方出身で、高校まで東かがわ市にいました。その時はまだまだ地域のコミュニティがあるので、もちろん先ほど言われたような地域の人から放課後や、何気ない時間の中で「将来何目指しているのか？」や、「期待しているよ」などのような、明るいようなコミュニケーションも実際ありました。僕はそのような時間はすごく楽しかったのですが、一方で様々な動画アプリが流行った時代でもあり、我々の世代はコスパとタイパを重視してしまう傾向にあります。当時。6 秒で面白さを共有するアプリがあったり、ここ重要ですよとまとめてくれるサイトがあったり。僕たちより 10 個くらい上の世代に聞くと 30 秒動画や、それから下の世代だと TikTok のような開始 2 秒・3 秒で情報を判断する世界になってきています。そうなると、先ほどのような、地域の方々との何気ない時間がもったいないと感じたり、その地域の方々と会話することによるデメリットが先に浮かんだりしてしまう。

どうしても室内で手頃に見ることができるもので情報を完結させる傾向が強くなってしまいます。僕の弟にも聞いた話ですが、そもそも身近な人を信用せず、対面のコミュニケーションにより余分な情報がネットよりも多く入ってしまう可能性があるというだけで、会話を遮断、遠慮してしまって、インターネットの情報を自分で精査し得ることの方が力になると考えているそうです。であれば名前や肩書のある人が発言した情報の方が、偏りがなく信憑性があるのでは、みたいな話が何回か出てきました。6 つくらい下の高校生の話でも出てきます。

なので、ライフ等について教えてくれる身近なところで言うと、地域ではまだまだあるかもしれないですが身近にいる人よりもネットの情報になっているのではと感じました。

○柴田座長　はい、中濵さんありがとうございます。他に、では岩本さん、お願いします。

○岩本構成員　はい、岩本です。

ライフデザインを教えてくれる人が、どこにいるのかという質問だったと思いますが、それに関しては自分の中では学校で、オフラインだと学校の比較的年齢の近い人や、兄弟の世代、斜めの関係で少し自分の 3 つ上の先輩などと話す時に、教えてくれる人はいるかなという感じです。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

反対に、ネットやオンラインに関しては、やはり目的があるものというか、ネットは何かの目的のためだけに使う、この人はこの目的、この人はこの目的、この動画はこの目的という、ある種合理的な関係になっているような感じがしています。

それは、自分が目的によって使い分けているとも言えると思いますが、目的が無いコミュニケーションというのは減っているなと感じています。身近で目的が無いコミュニケーションについて考えた時に、やはり親友や、すごく心が通じ合っているような友達というのが主かなと思いますが、そういう関係性の友達が今の世代は減っているのかなと感じています。

それは、コミュニティに所属しないことも増えてくるし、あとはある程度人間関係が自由だからこそ、そういう相手が生まれないというような、そういうこともあるのかなと感じています。

○柴田座長　岩本さんありがとうございます。

では時間も押していますので、次に行きたいと思います。議題②です。若い世代のラインデザイン支援の現状について御意見いただきたいと思います。

議題②については説明にもありましたけれども、事務局から、時間が押しているのでライフステージを２つに分けると時間的に難しいというご助言が来ましたので、学生の頃と社会人になってからの両方を含めてで良いので、若者構成員、おひとりおひとりから意見をいただきたいと思います。

「どんなライフデザイン支援があると良いと思うか」という点についてです。

では、どなたからでも構いませんので、挙手でお願いできればと思います。

では、小林さんお願いします。

○小林構成員　先ほどの発言の中に結構含めてしまったので、その中から抽出してという形になりますが、学生なので、学生の頃の社会人になる前のライフデザインのところに絞って、発言させていただきます。

先ほども申し上げさせていただいたのですが、情報提供のバランスというのはすごく難しいなと思いつつも、私的にはどちらかと言うと、その提供というよりかは、「その子自身がどういう価値観を持っているか」や、「どういう経験をしてきているのか」というのを見つめ直す、先ほど自分自身のことを立ち止まって考える時間がないというところもおっしゃっていただいたと思いますが、やはりそこの時間がすごく大切だなというふうに思っています。ただ、単に自分のことを見つめ直しましょうと言われても難しいので、例えば自分が将来どんな場所に住みたいのか、どういうコミュニティに所属していたいのか、仕事だけではなくてライフデザイン的にも、例えばお金や、自分はこどもが今欲しいと思っているのかなど、具体的な切り口から考えて、自分の価値観を洗い出した上で、その上で、ではどういう情報を選択していけばいいのか、情報収集の方法もネットだけではなく、いろんな方法があるというところを提示

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

してあげるような、そういうライフデザインの在り方もあるのではないかなと、思います。

○柴田座長　小林さん、ありがとうございます。では、続いてどなたでも構いません。

はい。では坂田さん、お願いいたします。

○坂田構成員　ありがとうございます。

私は就職して、社会人になった立場でという形ですけれども、改めて就職するまでの考えを振り返ってみますと、これまでは例えば大学受験であったり就職であったり、目の前すぐ近く、何年後かに大きな壁のようなものがあって、そちらに向けて取り組むというのが、大きな目標として毎回あったと認識している一方で、一度就職してみると、この先人生が遠くまで続いているような状況になって、この立場になって初めて、自分の生き方がまだ決められていないな、と芯が通っていないなというのを感じ始めているという状況でございます。

そういった中で、改めて学生時代にどうやって生きていくかというところをしっかり定めておくべきだったなと思うところもございます。なかなか社会人になってしまうといろいろと仕事に忙殺されるわけではないですけれども、仕事のことばかり考えてしまって、どうしても人生のことを考えるのを先送りしてしまうようになってしまっているように感じておりまして、そういった中で、一度立ち止まって自分のこれから先の人生のことを考えるタイミングというのが非常に重要であると改めて感じているところでございます。

これは、今の時代だからということではないのかもしれませんけれども、改めて社会人になってこれから先の人生が一本道ではない様々な生き方をされている方が周りにいる中で、自分がどの生き方を選んでいくのかというところは、考えていくというのに、またやはり時間が必要だなと感じているところです。

どういった生き方をしたいかということを考えるにあたっても、今から振り返ってみると、学生の時期というのは非常に大事な、有効な時期だったなと考えているところがございます。一方で自分が学生だった頃は、正直、自分の長い人生というものをどうやって生きていくかを考える機会があったのかもしれませんけれども、そういう意義をあまり感じたこともなく生きていたというところもございますので、改めてライフデザインを行う意義、今まさにこうやって設けていただいている場で、意義を実感するという経験を学生時代に積んでおければ良かったのではないかと、今少し考えているところもございます。

改めて社会人になって、学生時代に考えずに社会人になってライフデザインを考え始めた立場といたしましては、なかなかライフデザインをしっかり持たれている方、全く私のように考えてこなかった方もいろいろといる中で、先ほど相談の話が少しご

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

ざいましたけれども、私はどちらかというと友人関係や、そういったところで相談を持ちかけることが多いものではございましたが、そういった中で、同じような悩みを抱えている方、おそらくいらっしゃるとは思いますが、そういった方としっかり悩みを交換しながら、信頼関係を持ってライフデザインを描く場というのが、今少し欲しいというのが、個人的には思っているところでございます。

少し意見が発散してしまったのですが、若い時代、特に学生の時代などに考えておくことの重要性に、まず気付いたところでございます。

○柴田座長　坂田さん、ありがとうございます。続けてどなたでも構いませんので挙手をお願いします。

はい、では八木橋さん、お願いします。

○八木橋構成員　学生の頃は、やはり先ほど小林さんもおっしゃっていたように、自分が、将来の夢が具体的に決まっていなかったり、いくつでこどもが欲しいなど、具体的になっていなくても、自分は何をしたいのか、どんなことを大事に生きていきたいのか、そういうところもですし、ではそれに向けて、今の学生時代に自分が挑戦したほうがいいことや、やっておいたほうがいいこと、経験しておいたほうがいいこととはなんだろうというのを同じクラスの仲間でもいいですし、先生含めてでもいいですし、くだけた雰囲気で、自分の人生やこれから歩んでいく道について考えるような時間があったらいいかなというのは、実際に私も高校生に対してそういうプログラムをやっているので、学生たちの様子も見ていて、日々感じています。

やはりその中で、大事だなと思うポイントとしては、どんな未来を描いていても、お金は絶対についてくると思うので、一つに結婚したいにしても、結婚式したい時はこれぐらいお金かかるよ、先ほどの話にもあった親の介護となった時にはこれぐらいお金がかかるよ、実際それに伴った収入を得られるような仕事ができるように頑張ろうなど、そういった金銭的なプランというのも、ライフデザインしていく上ですごく重要なのではないかなと考えているので、そういったところも社会人になる前の段階で考えていけたら、就職のタイミングでボーナスのことを見る子がいるかもしれないし、そういう視点が広がる機会があったらいいなと思いました。

社会人になってからに関しては、やはり社会人になってからのほうが、どちらかというとライフデザインについて考える機会がなかったり、周りの人と相談したりというのがあまりないなというのは、今振り返ってみて感じています。

ただ、やはり少し先を行く会社の先輩が、小学１年生になったこどもが、学童がと言って、慌てて帰っている姿というのもすごく私にとっては自分のライフデザインを考える上で参考になっているタイミングでもあって、保育園だけじゃなくて小学生になったタイミングもこんなに大変だと、その時初めて知った部分もあります。やはり一緒に働く仲間たちがどういうふうにデザインをしていて、今現状どんなところに困

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

っていて、少し先にこんな不安があってというのを同じ職場の中で共有して、より働きやすい環境をチームだったり職場内だったり、で作っていける機会というのも、非常に将来設計していく上で、人生を選択していく上で重要なのではないかなというのを感じます。

○柴田座長　はい、八木橋さん、ありがとうございます。続けて、いかがでしょうか。

　では、郡司さんお願いします。

○郡司構成員　ありがとうございます。

　まず、大学院生の立場として2点お伝えしたいと思います。

　奨学金の問題で、親の年収によって対象から外れてしまう、特に学部生は親の年収によって支援を受けられる、受けられないという規定があります。修士課程からなぜかそれが外れたりするのですけれども。親で理解がある人であれば、大学進学をすごく理解して、お金も出して支援してくれますよね。一方で私の友人がそうでしたが、親が学費を出してくれないであったり、仕送りを止めてしまったりというような親御さんでした。

　親の年収があっても、自分自身には全然お金がないからこそ、奨学金を借りたいけれども、親の年収ではじかれるということで、本人はすごく苦しそうにしていたことがありました。親の年収を理由に対象から外すということは、なるべくなくしてもらえると、その子が学びたいこと、挑戦したいことに対して、お金を借りるという行為が少しでもできるように、ハードル下げられるようにというのは、ぜひしていただけるといいなと思っています。

　大学院生としては今、博士後期課程に進学する者に対する支援というのが国として拡充いただいている最中ではあって、今まで学振といういわゆるDC1、DC2と呼ばれるところはだいたい月20万円ぐらいお給料みたいな形でいただいていたりしますが、そこから別枠で文部科学省がSPRINGという制度を作っていただいていて、私はそこに採択いただいていて月18.5万円いただいています。そこから社会保障に関するお金を納めたりすると、結局手元に10万円台前半しか残らなくて、そこから家賃・光熱費を出したりとすると、結局自分の手元に残るものはなくて、むしろ貯蓄を崩して今学んでいるという状況だったりします。その状況で、26歳で、こどもを産むや育てるみたいなところまではとてもじゃないですけれども考えられず、自分のことで精一杯です。

　結婚・出産適齢期にも関わらず、できないというのが、正直なところだなというのをひしひしと感じているところですので、この大学院生に対する支援みたいなところも、人数は少ないかもしれないですけれど、ぜひ就職1年目の人ぐらいはお金をもらえるようにしていただけると、とてもありがたいなと思っているところです。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

あとは大臣にお伝えすると、今週末結婚式を控えておりまして、いわゆる新婚の立場にもなりますが、こどもを自分自身が持つことができるのか・できないのかということを早めに知っておくことが大事だなと思うことがありました。

東京都やさいたま市が不妊検査に対する助成金を、東京都だったら5万円で、さいたま市（埼玉県）だと3万円出されていたりします。そういったものを法律婚であれ事実婚であれ、申請すると助成金がもらえたりするみたいです。自分自身がライフデザインを考える上でこどもをもつ、もたないことはすごく大きなことだと思うので、全自治体でこういったものを進められるといいなと思っています。他自治体であれば、やはりそういったところには財源がないというお話もあったりするので、国が中心に動いてほしいです。自分自身、まずこどもを持つことが選択肢としてあるのか、自分の身体的に難しいのだったら治療するや、あとは養子というところも考えられたりするかなと思っていたりするので、そういったあたりも、ぜひライフデザインという観点で、そしてSRHR（セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ）の観点で深めて考えられるといいかなと思っているところです。

以上になります。

○柴田座長　郡司さん、ありがとうございます。では、続けていかがでしょうか。

はい、中濵さんお願いします。

○中濵構成員　話が自分の中でまとめきれていなくて、ざっくりかつ軽くにはなりますが2つほどあります。

今自分が強く思っているのは情報をしっかりと降ろしてほしかったというところです。

本来少し上の世代の方々が30代、40代で得るはずだった情報が、10代でも得られてしまう、または受けてしまうのが現状だと思います。

先ほどの介護の話にもありましたが、上の世代の方々が今まで身近なところから少しずつ受けていた情報が20代の自分たちの手元にすぐに届くようになったことから、必要以上に不安を感じてしまいます。

私の場合も、いずれは自分がやらなければいけない、その立場にならなければいけないと考えるとそこにかかるお金を計算してしまいました。

そうなると、介護どころか結婚、出産をまず自分ができるのかどうかをもちろん男側の立場から考えることもありますし、結果的に踏み出せなくなります。だからこそ自分が踏み出すタイミングに適切な情報リテラシーを上げるような教育と判断基準の例を踏まえた教育を学生のうちにして欲しかったという思いがすごくあります。

2つ目ですが、自分自身と他人の比較についてです。人間誰しもあることだと思いますが若い世代はSNSの影響もありより強く比較しその影響を受けやすくなっていると考えられます。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

誰よりも優れているや、平均はどこなのかのような対象となる情報源として、今まではモデルとなる人が親や、会社の上司などの身近なコミュニティ内だったと思いますが、今はモデルケースになる人がいないのが現状にあると思います。

弟や、私の友達に、「誰目指している？」と聞いたらわからないという答えばかりでした。

「親はそもそも違う、自分の言うことを反対してくる」「先生は先生だから、自分の仲間じゃない、先生は学校で教えてくれる人だ」というふうに、自分と周りを差別化し、線引きしてしまう環境がすごくできてしまっていると感じました。

だからこそ、この世代の人たちはこういうライフコースを歩んでいるや、こういうモデルケースがあるという例を世代ごとに集まって、若者たちに伝えていってもらえると、今の世代との比較になりライフデザインを考える良い刺激になるのではと思っています。

現在私もそういう場があればぜひ参加したいですし、それが会社単位、地域単位、国単位なのかどの規模においても存在があると嬉しいと思います。

○柴田座長　はい、中濵さんありがとうございました。では岩本さん、お願いします。

○岩本構成員　求めるライフデザインの支援についてですけれども、まず、個人的に思うこととしては、やはりライフデザインを描くということに対する実感というか、描かなきゃいけないという意識が学生の身としてはないかなと。学生の身としてしか今は言えないですが。

なので、その実感をどうやって持つかというのが課題になると思います。

ライフデザインを描かなきゃいけないと周りに言われることがあっても、自分からライフデザインを作ってやっていきたいという関心というか、興味が出ないと、ライフデザインを設計することには繋がらないのかなと思って、それを自分から興味を持って描くという状況になっていないのが問題なのかなと思います。

なので、例えば関心を持つということだったら、具体的にどういうライフデザインを描いている人がいて、今の世代だったらこういう人生が描けるや、こどもを持つことにも実感があまりないことなので、それを実際に体験できることがあったら実感できるのかなと思います。やはりまずは人生設計をしたいと思うことが大事なのかなと思います。

まだ不完全ですが、そう思いました。

○柴田座長　岩本さん、ありがとうございます。

これで若者構成員からの御意見は１周できたと思いますので、次は有識者構成員も含めて全体でどんなライフデザイン支援が必要かという点を議論したいと思います。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

また、申し遅れましたけれども、三原大臣が先ほどお越しいただきましたので、御参加いただいております。

では、皆さんと全体を含めながらの議論で、だいたい目安としては、14時50分までありますので、10分少しですね。ぜひ、有識者構成員の方々から挙手をまずいただけると。

では、天野さんお願いします。

○天野構成員　ここに来られている方で、家族留学という制度に参加したことがある方はいらっしゃいますか。いらっしゃらないですね？

実は、皆さんのお話を聞いていて、すごくお勧めしたいなと思いました。私は家族留学制度の学生さんの受け入れ家庭でした。

娘が小学生の時に、名古屋大のカップルの女性の方が、わが家を訪問されました。お母さんはピアノの教師、お父さんは地元の調理師という方でした。1年上の彼が東京に会社員として就職することが決まり、彼女はその彼を追って1年後に東京に就職する予定の方でした。

東京で会社員同士の夫婦になりたいと思っていて、こどもも欲しいと思っている。

だけど、自分の両親からは会社員カップルの生活の想像がつかないし、実現できるか分からないので、東京都で、会社員カップルで、小さいお子さんがいる家庭に家族留学をしたいというオーダーを出されたそうです。

我が家に白羽の矢が立ちまして、丸一日、朝8時スタートの夜8時までいらっしゃるということで、夫も大歓迎、娘も待ち構えて、いろんな話を質問していただいて、一日一緒に過ごさせていただいたのです。彼氏に伝えたいということで、夫の目線からもいっぱい話を聞いて帰られました。そういう制度があります。

慶應大学の当時学生だった方が発起人になって立ち上げて、任意団体でやっていたものが株式会社化し、いまはNPO法人として活動しています。

現在はどういう条件で受け入れ家庭を決めているかわからないですが、皆さんのお話を聞いて、ぜひ体験いただきたいと思いました。当時は共働きで夫婦ともに正社員で小さいお子さんがいる家庭はまだまだ少なかったのです。

今もお母さんがパートで共働きというご家庭は結構あります。お父さんがバリバリ働いているご家庭は多いです。しかし、夫婦そろって正社員でこどもがいる家庭の話を聞きたい！と決めておられました。

今日の皆さんのお話を聞いていると、幼い子供がいるご家庭だけでなく、お子さんが中学・大学といったご家庭や、介護も発生しています、といったご夫婦からも話が聞けるように、家族留学の制度拡大をしていかれたらいいのにと思いました。

もっと広く若い世代の皆さんにこの制度をお知らせして、大学生の間にどんどん参加していただけたら。当時受け入れ家庭が200家庭あって、全国にありました。本日

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

四国から参加されているメンバーがいますが、四国の受け入れ家庭もありました。もっともっと国や自治体が媒体になって、学生さんにお伝えできたらいいですね。大学生だけではなく、高校生の方にも伝えていただきたい。今も 5 割ぐらいは高卒で就職する方もいるわけですから。

あともう 1 つだけ、ライフデザインとはいえ、コントローラブルなイメージを過度に持つことは危険です。私は人口動態というデータサイエンス、科学的な発想を必要とする仕事をしていますので、発生学的可能性、つまり何事も限界値があることを知っています。特に、結婚と出産がそうです。

出産に関して皆さんのお話をお伺いしていても、女性はかなり意識されていますね。ところが男性は関係ないと思ってらっしゃるように見えます。婚外子が 2 パーセントの日本の場合は、結婚の発生ありきの出産です。

男性の統計的婚期も想像以上に短いです。初婚同士で結婚している男性の母集団では、38 歳までの方で 9 割いきます。34 歳までの方で 8 割、なんと 20 代までの方で 6 割です。

実は 20 年前と統計的な結婚多発期は変わってないのです。27 歳が最頻値で、26、28 歳と続きます。これ、男性の結婚年齢のお話です。

誤解している方がものすごく多く、いつまでたっても男の人は結婚できると思い込んで、ライフデザインを組まれると大変なことになります。これはそうしなさいという話ではなく、発生学的知識としてライフデザイン設計上、知っておいていただきたいです。

郡司さんから出ていた不妊も、半分の理由が男性ですから。女性理由は半分でしかないのです。男性理由が半分です。

世界保健機構のプレコンセプションケアの項目は、女性 13 項目、男性が確か 5 項目です。日本では男性は肥満だとこどもが授かりにくいことや、お酒が飲めない方や飲むと赤くなる方が、飲み続ける歴が長くなるほど男性の不妊が強まるなど、一切啓発されてないですね。プレコンセプションケアに関しては、啓発にジェンダーがあります。

フランスでは不妊治療を始めるカップルは、両方が検査結果を出さない限り、社会保障からお金が出ないのです。

男性側のマッチングと出産に関してのデータ啓発を特にもっと強化するべき国だなと、皆さんの話を聞いていても強く思いました。以上です。

○柴田座長　天野さん、ありがとうございます。では、オンラインで島津さんも手を挙げておられるということですので、島津さん、よろしくお願いいたします。

○島津構成員　よろしくお願いします。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

もうそろそろ退出しなければいけないので、感想だけになるかもしれませんけれども、今の2つ目の論点を伺って、2つ考えました。

やはりこのライフデザインのことを考える機会って、早ければ早いほど、ある程度大学生のうちに考えることが大事なのかなと思いました。

というのも、やはり社会人になってしまうと、自分のことや、生き方というものをふと立ち止まって考える機会が、少なくなるのではないかということで、できるだけ早めに考えておく機会を持つことは大事だと思いました。

一方で同時に大事なのは、社会人になっても所々で自分の生き方をきちんと考える機会は、やはり必要があるのかなと思いました。

2点目は、今情報がいろんなところで入手できます。ただし、そこで入手できる情報は断片化された情報である可能性もあります。例えば、社会で活躍されている方がいらっしゃるとしても、モデルとなり得る方も、ある一時点である一側面でだけでその活躍を見て、その裏側にある背景であったり、そこまでに至るプロセスや、ストーリーであったりというものがあまり情報として入ってこない場合もあります。そこだけを見て、モデルと考えてしまうと、少しデザインの仕方が誤ってしまう可能性もあると思いました。なので、モデルを設定するときにも、その人をトータルで考えていくや、ストーリーとして考えていくなど、そのような視点も必要かなと思いました。

最後まで同席できないのが残念ではございますけれども、今日はどうもありがとうございました。

これにて失礼させていただきます。ありがとうございました。

○柴田座長　島津さん、ありがとうございます。では、宮木さん、いかがでしょうか。

○宮木構成員　ありがとうございます。

ライフデザインについて最初のところでどなたがおっしゃっていたかと思いますが、八木橋さんですね。

「都度考え直していく」というところと、それから「こうありたい」という方向性を持った上で、それに向けたアドバイスを得たいと話をされたと思いますが、これ非常に重要だと思っています。

我々30年以上ライフデザインについて発信し続けている中で、常に「ライフデザインを適宜見直していく」ということを言ってきているのですね。

ライフデザインを「設計図」と考えると、コロコロ設計図を変えるのは、あまりよくないのではないかと思っちゃう人もいますが、いかに柔軟に自分のライフデザインを見直していくのかというところは非常に重要です。また、「こうありたい」という方向性をしっかり持っていくというところが、すごく重要だと思っています。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

また、ありたいゴールを設定した上で、手段として何を選んでいくのかというのが、マイルストーンにもなっていくと思いますが、ともするとそのマイルストーンが目的になってしまいます。

大学受験や就職など、そういったあくまで手段として考えなきゃいけないものが、目的として混同されてしまうことによって、長期的に自分のありたい姿というものが見えなくなってしまっている。

この2つを考えると、まず自分がどういう人生を歩みたいかということをしっかり考えて、さらにそれは都度都度、軌道修正をできるものだということを「どこが教えるのか」というのが課題だと思っています。

ライフデザインにおいて大事な情報や大事なポイントというのはだいぶ見えてきている中で、どこがそれをやってくれるのかというのが、これからライフデザインを考える上での課題なのかなというふうに私は考えています。以上です。

○柴田座長　はい、宮木さんありがとうございます。

ではあと1分で14時50分になりますので、最後に私からも。構成員の一人ですので。

非常に多様な視点がありまして、とりわけ興味深く思ったのは、ライフデザインを描いている人としてのロールモデルがいないという、そういった趣旨の御発言も確かあったように思います。確かになと思いました。

つまり、ライフデザイン支援はします、ライフデザインは大事ですというふうに言った時に、じゃあライフデザインを上手にできている人や、理想的にライフデザインを描いている若者がどんな人なのかというのは、イメージがつきにくいかもしれない。

ただ、実際にはいると思いますよね。構成員の皆さんも恐らくそういった側面があると思うので、若者構成員の方々も。

ライフデザインというのが例えばこんな感じで若者が描くことができるし、先ほど宮木さんからもあったように、一度描いても柔軟にこうやって変えていくこともできるというような、具体的なイメージと言いますか、そういったロールモデルを示せると、もう少し身近になるのかなという。

私はもう若者じゃなくて40代ですけれども、40代になってもやはりライフデザインの見直しが必要で。特に私にとっては妻との関係性が非常に重要なので、妻との関係性の状況によっては、自分のライフデザインを適宜見直して、家事育児の分担を話し合って調整したり、それに合わせて仕事の量や働き方も調整したりして、妻との関係性を良好に保つというのは、日常的にやっているものです。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

なので、大人にとってもライフデザインのロールモデルというのはどんなもので、宮木さんからもありましたけれども、そういったロールモデルを誰が提供してくれるのか。

おそらく、身近なパパ友・ママ友だったり、あるいはメディア上の人だったりするのかなと現状は思いますが、例えば仮に政府や自治体がライフデザインを公的に支援するならば、大人にとってのライフデザインのロールモデルをどう提供できるのか、という論点も大事かなと思いました。

その上でその点から、天野さんもおっしゃったように、家族留学ってすごく面白い取組で、多分、大人にとっても。私にとっては、パパ友やママ友の家に家族みんなで遊びに行くのが、家族留学ですよ。

家族のあり方も夫婦のあり方も自分たちとは全然違うけれども、こういうやり方もできるという、大人にとってもそういう家族留学はすごく大事です。実際、パパ友やママ友の家に家族みんなで行くことで、私はそれができているように感じています。

でも、状況によってはできない人もきっといますよね。余裕がない、パパ友ママ友にたまたま恵まれていないといった状況もありうると思うので、そこをどう公的に支援できるのかというのも大事かなと思いました。

では三原大臣がすでに来られていますので、大臣から御発言をいただければと思いますが、報道関係者が入るということですので、少しお待ちいただければと思います。

では、三原大臣よろしくお願いいたします。

〇三原大臣　まず私がこども政策を担当しております、そして、若者も担当しております三原と申します。

本日は初めましての方も、またよろしくお願いしますの方もいらっしゃいますけれども、今回、若い世代視点からのライフデザインに関する検討会第１回ということでございます。御出席を賜りまして本当にありがとうございます。

本日第１回ということでありますので、皆様から自己紹介を兼ねて、様々な御意見頂戴したかというふうに思います。

実はですね、つい最近までこの春まで、若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループというのを全８回開催いたしまして、出会いですとか、結婚、こどもを持つことなどについて、若い皆さんの悩みですとかそうしたことを忌憚のない様々な御意見を伺った上で、有識者の皆様と共に最終取りまとめということでいただいたところであります。

その上で今回、こうしたまたワーキンググループというか、検討会ということで、第１回目を開かせていただきました。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ （https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

前回のワーキンググループでは、若い方たちの価値観ですとか選択肢、こうしたものの多様化する時代において、皆さんが時代の生き方の正解というものを求めるわけではなくて、納得解を得るべく、自分自身でより良い人生の選択をしたいという、そのための正しい情報を知るということが大変重要であるというようなこともテーマとなりました。

知らないで選べなかったということではなくて、先ほど郡司さんおっしゃったように、様々なこと、自分のこともちろん知ってから選べるということが大変重要だろうというような、そういうワーキンググループの中でのお話をいろいろとさせていただいたところであります。

今回、今日もすでに大変いろいろな御意見を頂戴いたしまして、まさにライフプラン、これを考えるということ、これはどの時期に皆さんに考えていただくことがベストなのかというようなこともちろんありますし、いやいやこれはずっと続くものだよと、何度でも見直していいのだよということを、やはりもっとお伝えをするべきことなのかなと、周知をしていくことが大切だなということも、今日もう早速学ばせていただいたところでございます。

そしてまた目指す人がいないということ。非常にショッキングでありましたけれども、高校生の皆さんからすれば、それが本音であって、身近にいないだけではなくて、どこにそのロールモデルというものを私たちは選んだらいいだろうということ、そこからしっかりと私たち政府がということではなくて、それぞれの中で高校生や大学生の皆さんが、それぞれの思いの中でどなたを選んでいくためのその選択肢ってどこにあるだろうということですよね。

先ほど、宮木さんからどこが教えていくのだというようなお話もありましたけれども、それって本当にどこなのだろうということ、こうしたこともこれからまた皆さんと共に考えていく大切なことではないかというふうにも思います。

そしてまた、奨学金の問題であるとかSRHRの問題、プレコン、これも生物学的にしっかりと男性ということを決して置き去りにしてはいけないよということ、非常に重要な視点だというふうに思います。

そこにも私共もしっかりと寄り添っていきたいということを今日すでに学ばせていただいて、本当にありがたかったなというふうに思っております。

また、次回以降は具体的な論点設定をした上で、また議論をしていくということになってまいると思いますけれども、ぜひですね、今日のように、忌憚のない御意見を頂戴できることを心から望んで、そしてまた今日ちょっと遅れてしまいましたけれども、次回からも御一緒させていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

本日は本当にありがとうございました。

この資料に関する詳細は、こども家庭庁ホームページ「若い世代視点からのライフデザインに関する検討会」ページ　（https://www.cfa.go.jp/councils/wakaisedaishiten）からご覧いただけます。

○柴田座長　ありがとうございます。とても勇気付けられる御言葉をいただきました。

では、事務局から何か補足等ありますでしょうか。

○橋爪室長　議事録につきましては、皆さんに確認をさせていただいた後、後日ホームページで公開させていただきます。

また、私の方で記者ブリーフィングをさせていただきますので、御了承いただければというふうに思います。

○柴田座長　はい、ありがとうございました。あと２分ですね。

私が司会になかなか慣れていないもので、途中で時間が押してしまいましたけれども、なんとか皆さんの御協力のお陰で時間内に終えることができそうです。

今回ですね、もし意見が出なかったら順番に時計回りでといったアドバイスも、事前に事務局からいただいていたのですが、全く心配なく皆さん本当に積極的に御発言いただきまして、本当にありがたく思っております。

今後も若者構成員や有識者構成員の皆さん方、積極的な御発言をいただければと思います。

今回、非常に多様な御意見をいただきまして、たぶん事務局の人選がすごく上手だったなと思います。びっくりしまして、これだけ様々な方向性からの御意見が出ました。

確かにこれまでこういった議論は、今回の資料でも特に女性の場合は年齢層によって望む働き方が大きく変わるよ、などそういうデータもありまして、どちらかというと男性が置き去りと言いますか、あんまりメインでないような形で議論がされることも多かったのかなと。やはり女性の方がライフコースが多様でして、どのライフコースを選ぶかによって、世帯の生涯可処分所得が１億円以上変わる場合があるというデータも、今回出ていました。それだけ多様な選択肢があるわけですので、女性がこれまでフォーカスされがちでした。しかし、やはり男性視点も非常に重要だなと今回思いました。今回構成員の選定には、ジェンダーバランスもうまく事務局が考慮してくださいました。

これからも様々な意見を出していただければと思っております。

では、時間になりましたので、これで第１回検討会を終了したいと思います。

お疲れ様でした。ありがとうございました。